様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７００６９６

研究課題名（和文）反省的実践を支える体育教師スタンダードの開発

研究課題名（英文）Development of Physical Education Teacher Standards for Promoting the Reflective Teaching

研究代表者
鈴木　直樹（Naoki, Suzuki）

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：６０３７５５９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,200,000円、（間接経費）　960,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、学習者の学びに参与し、反省的に実践する教師の全体像としてスタンダードを明らかにすることが目的であった。米国と豪州のスタンダードでは，現場での指導経験を含めて段階的に設定されているのに対して，日本の大学や大学院のカリキュラムで求めている姿は，高いレベルのものであることが明らかとなった。また，教員養成課程の学生と熟練者の間には，授業中の意思決定に大きな差が見いだされ，その成長を踏まえたスタンダードの設定が必要であることも明らかとなった。以上のような結果を踏まえて開発されたスタンダードを活用して，反省的に授業改善に取り組む教員養成プログラムを実施したところその有効性が実証された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop standards which were whole image of the teachers who promoted students' learning and taught students reflectively. The physical education teacher standards of the U.S. and Australia were set up including practicum experience in the real school. On the other hand, the expectation for getting a PE teacher license in Japan was implicated too high level compared with them. Moreover, the big differences were found out between the pre-service teachers and expert teachers on decision-making for teaching. Therefore, it became clear that standards should be set up based on the development of decision-making. The standard was developed based on the above results. In addition, the standards were incorporate into PE teacher training course. As a result, the validity of standards was proved to develop the reflective teaching skills.

研究分野：複合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学＿身体教育学

キーワード：反省的実践　体育　体育教師スタンダード　教師教育　Professional Development　教員養成　意思決定　国際比較

１．研究開始当初の背景

2010年6月に、中央教育審議会に対して「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」が諮問された。また、教員免許更新制の見直しや教員養成六年制の導入の議論など、専門職としての教師の成長に大きな関心が寄せられている。この専門性に対して、近年では、高い内容知識や技能を所有している「専門的知識重視モデル」（Shulman&Wilson, 1989）から教育活動の中で省察、反省することを通して自らの資質・指導力を向上させるという「反省的実践家モデル」（Schon, 1983）が目指すべき方向として示されるようになってきた（澤本, 1995; 佐藤, 1993）。体育授業でも，Siedentop & O'sullivan(1992), Ryan(2006),木原(2006), 鈴木(2007)らによって，反省的実践家の重要性について指摘されている。鈴木（2007）が，平成17年度-19年度に科学研究費補助金の助成を受けて開発した「質的研究法」も，この考えに立っており，教師の授業改善法は，反省的授業実践の中で活用されている。この反省的実践について木原(2004)は、自らの授業実践に対する「問題の発見」と「問題の解決」とがあると指摘する。教師は熟達するにつれ、「問題の発見」のみならず、「問題の解決」ができるようになる（久保, 2008）が、これは、鈴木（2010）が，平成20年度-22年度に科学研究費の助成を受けて明らかにした「教師の観察行動におけるエクスパタイズ」の獲得における変化と同様である。さらに、厚東ら(2005)は、力量ある教師は、反省的思考の観点として、授業設計場面では子ども一人ひとりにあった授業設計が立案できていたかどうか、また授業展開場面では子どもたちが学習課題を明確に掴み、課題を自力で解決できているかどうかの観点をそれぞれ有していることを明らかにした。

すなわち，教師の力量を反省的実践として支えていくためには，授業をどのように捉え，問題を発見し，その問題を解決しようとするかという反省的な思考が必要となる。鈴木（2009）が，教師の観察行動において明らかにしたように，適切なスタンダードを持ち，振り返り，思考ができれば教師の成長を支えることができる。しかし，現在の日本にはこのスタンダードがなく，自らの経験的な振り返りの中で問題解決が行われていると言ってもよい。すなわち、教師像のあいまいさに教員養成、現職教員研修の機能不全の理由が内在していたといえる。

ところで，研究代表者は，コミュニケーションに学習評価の機能を見出し，実践研究を通し，そのシステムを解明してきた結果、価値判断としての評価のみならず、意味解釈としての評価が重要な機能を果たすことを明らかとしてきた。そこで、このような視点に立った学習評価の実践化について検討を行い反省的実践の重要性について示唆してきた。また、このような授業実践における授業改善を支える質的な研究方法の開発《2005－2007 科研費研究》に取り組んできた。これらの取り組みによって教師行動の変化を促し、運動の意味生成の学習として質の高い授業が行えるようになってきた。しかしながら、この質的な研究による授業改善でも、「直接的指導」「マネジメント」「相互作用」の教師行動に着目がなされ、「観察」の教師行動が欠落する傾向にある。そこで、教師の観察行動におけるエクスパタイズ向上について明らかにしてきた《2008－2010 科研費研究》。この研究を通して、教師が適切なスタンダードを持ち、授業を観察することで教師の力量形成を支えることが明らかとなった。そこで、これら二つの研究を土台として、体育教師の指標となるスタンダードを明らかにすることは、教師の力量形成を支える具体的実践につなげる上で必要不可欠であると考えるに至った。

２．研究の目的

本研究では，まず，体育教師の資質・能力規準の観点を反省的実践家という専門職像から明らかにする。

これまでの研究で，授業改善において教師の意味解釈が重要であり，教師の観察行動の必要性について明らかにしてきた。これまでは、教師行動を細かな要素からとらえ、明らかにしてきたが、この研究では、学習者の学びに参与し、反省的に実践する教師の全体像としてスタンダードを見出していく。また、これらのスタンダードを手掛かりにして、教師が成長するための現職教育及び教師教育プログラムを作成し、スタンダードの信頼性と妥当性を探ると共に、その効果について検討していく。

このように本研究では,体育教師の反省的実践という行為に着目し,「学び続け、成長し続ける教師」を助け，曖昧となっている反省的実践の具体化と実践化への手がかりの還元を目的としている。

３．研究の方法

１）海外ですでに作成されているスタンダードの比較検討及び，海外の教員養成と現職教員の力量形成に関しての実地調査により体育教師のスタンダードについて検討を行った。

＊米国と豪州のスタンダード

＊米国，豪州，芬蘭の実地調査

２）体育教師に必要とされる資質・力量についての検討から体育教師スタンダードの観点を明らかにする。

＊先行事例の検討及び実験

３）体育教師スタンダードを作成し、その有効性を検証する。

４．研究成果

（１）体育教師スタンダードについて

本研究では，教師の成長といった観点から体育教師に求められる力量と力量形成上の課題を明らかにすることを目的とした。そのため，学部卒業レベルのスタンダードと修士卒業レベルのスタンダードが作成されている米国の体育教師スタンダードとキャリアステージごとにスタンダードが作成されている豪州の教師スタンダードを検討した。その結果，体育教師の力量は，「教科内容」「指導に関する内容」の理解に加え，「子どもに対する知識（理解）」と「教師に対する知識（理解）」が必要であることが明らかになった。また，検討した 2 つのスタンダードでは，現場での指導経験を含めて段階的に設定されているのに対して，日本の大学や大学院のカリキュラムでは，これを実習程度で考えており，実務経験とはつながっていないことが明らかとなった。このことから，日本の課題として教員養成学生と現職教員の職能プログラムを連関させて考えていく必要があることが示唆された。

また，米国と豪州，芬蘭にて聞き取り調査を行い，教員採用制度等を手がかりにしながら，目指すべき教師像を明らかにしながら，反省的実践としての力量をどのように求めているかを明らかにすることを目的とした。その結果，米国と豪州では実践を中心にした教員養成を中心として，とりわけ米国では，実践を通して反省的実践家としての教師を強く求めていることが明らかになった。一方，芬蘭では，教師のスタンダードに適合させていくというよりも，研究を通して反省的実践家を育成し，学び続ける教師の育成に取り組んでいる方向性を見出すことができた。

（２）体育教師に必要とされる資質・力量

本研究では，熟練教師と未熟練教師の体育授業における学びの観察の仕方及び観察対象の違いを明らかにし，観察時の教師の意思決定能力を向上させるための手がかりを見出すことを目的とした。

被験者は 10 年以上の教師経験があり，中高の体育の教員免許をもち，評判の高い 5 名

の熟練小学校教師と，体育の教授法に関する理論を学んでいるが，教育実習を経験していない教師志望の教員養成課程学生 5 名とした。実験では，各被験者に教師がどのような意図をもってその場面に参加しているかを提示した上で，静止画を 10 秒間観察させた（5 場面）。なお，写真を観察している間，被験者の視線を追尾し，記録した。その後，各被験者に，写真で示された場面について指導者として意思決定したことについて 1 分間自由に語らせた。これらによって得られた静止画を観察する視線の軌跡とインタビューデータを総合して検討した結果，以下 3 点が考察された。「教員養成課程の学生は，観察を実施した後にその場面を振り返るのに対して，熟練教師は，指導を通しながら振り返り，意思決定を行っていた。」「教員養成課程の学生は "客観的"に，学習者の行動を判断しているのに対して，熟練教師は "主観的"に，学びを解釈し，次にとるべき教師の行動を意思決定していた。」「教員養成課程の学生は，学習者の態度を評価し，熟練教師は，学習の文脈の中で状況を評価しながら，意思決定を行っていた。」

本研究の結果，熟練教師と教員養成課程の学生間では，観察の方法のみならず，観察時の意思決定に大きな違いがあることが明らかとなった。したがって，教師になっていくプロセスにおいて意思決定の成長を踏まえた教師教育及び現職研修が必要であることが示唆され，このような観点からのスタンダード作成が望まれる。

（3）スタンダードの開発

教員養成課程の学生の成長を教育実習経験前，教育実習前期，教育実習後期の 3 段階に分け，（1）（2）の研究結果を手がかりとして，それぞれが終わった段階で期待するスタンダードを以下のように設定した。

＜教育実習前＞

授業を振り返る視点を知っている。

＜教育実習前期＞

観察した授業や実践した授業を客観的に振り返り，教師行動や教材の改善のポイントを見出し、実践している。

＜教育実習後期＞

授業実践中や授業後に、授業の事実、児童生徒の学びの事実を通して指導状況を振り返り，改善のポイントを見出し，状況と文脈に応じて指導を修正している。

これらのスタンダードを教育実習前の模擬授業演習，事前事後の指導で活用して実践した結果，意思決定の側面で有意な変容を見出すことができた。

今後は，カリキュラムレベルで検討し，よりよいプログラム開発を目指していきたいと考える。

本研究の特色は、反省的実践というこれまで個人の経験に委ねられがちであった力量形成の問題に対して、質的なアプローチから手掛かりとなる体育教師スタンダードを提示したところにある。また、教師の専門的力量を支える教師の育成が大きな社会問題となっている今日の状況の中で、現職教員研修及び教師教育に生かすことができる活用プログラム例とその成果を提示するところに大きな特色がある。反省的実践という言葉は、声高に叫ばれているが、現場ではその言葉を理解するどころか、困惑しているのが現状といえる。本研究は、このような現状に対して授業を改善していこうとする教師にパースペクティブを与え、実践化につなげていくという理論と実践をつなぐ実践的な極めて特色のある研究であった。

さらに、独創的な点は、その研究方法にあ

った。まず、海外の研究動向及び現状を現地の小中学校の実際の授業の中で調査することによって、状況と文脈を捉えながら教師の反省的実践家としての理想像に迫っていった。加えて、質的データと量的データを融合させ、研究を多面的に捉え、分析した。

本研究に取り組んだ結果、体育教師像が明確になり、教師教育を進める上での手がかりを提示することができた。すなわち、「①教師になる」「②教師として成長する」「③教師を育む」といった3点に役立つ、意義ある研究となったといえる。また、本研究成果は、教師自身が力量形成できる思考を提供するのみならず、教師の力量形成に資する教員養成上の取り組み及び、現職教員研修の取り組みを開発できる基盤になることが期待される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

鈴木直樹，齋藤祐一，田島香織（2012）体育教師に求められる力量に関する検討―米国と豪州の教師スタンダードを手がかりとして―．東京学芸大学研究紀要（芸術・スポーツ科学系）．第64集．pp.137-144 https://ir.u-gakugei.ac.jp/handle/2309/131957

鈴木直樹，田島香織，菊地孝太郎，石塚諭（2013）体育教師の観察時における意思決定能力の成長―教員養成課程の学生と熟練の教師の比較を通して―東京学芸大学研究紀要（芸術・スポーツ科学系）．第65集．pp.137-146 https://ir.u-gakugei.ac.jp/handle/2309/134256

〔学会発表〕（計６件）

Suzuki, N., Nariya, A., & Jarett, K., (2011) “Contribution Outcomes”for Assessment in Ballgames. Australlian Association for Research in Education. (2011年11月30日，豪州タスマニア)

Suzuki, N.(2012) Impact on the Reflective Teaching by “Lesson Study”. 2012 MTAHPERD/NWD AHPERD Conference (2012年8月6日～7日，米国モンタナ州)

Suzuki,N.(2012) Pre-Service Teachers’ Observation and Decision-Making Skills. National Physical Education Teacher Education (PETE) Conference (2012年10月6日，米国ネバダ州)

Suzuki, N. (2013) Planner: Krotee, M., Building Global Bridges Ⅴ:Sharing Perspectives From Around the World. Speakers: Suzuki, N., Fu, J. & Tong, K.,2013 AAHPERD National Convention (2013年4月25日，米国ノースカロライナ州)

Suzuki, N. (2013) The Trial of Creating the Exit Standards in Student Teaching. AIESEP World Conference (2013年7月4日～7日，ポーランド・ワルシャワ)

Suzuki, N. (2014) Teachers’Assumptions towards Learners’Self Assessment. AIESEP International Congress (2014年2月11日，ニュージーランド・オークランド)

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者

鈴木　直樹（東京学芸大学）
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：６０３７５５９０